

NPO法人越ヶ谷市郷土研究会の歴史講演会
―古文書から読む―

おりせさん（平田篤胤夫人）の家計・苦勞ばなし

2014年1月26日 於越ヶ谷産業会館

横山鈴子

①おりせさんについて

文政元年11月18日越ヶ谷の「とうふや」の娘（りよ？↓お里勢、織瀬）篤胤と縁付く。

武蔵国埼玉郡越ヶ谷新町 聚商山崎長右衛門（文化二年人門）油長 養女

武蔵国埼玉郡越ヶ谷 小泉市右衛門（文化二年人門）塗師 仲人

*「お里瀬と称ふべし 文政元年十一月十八日 篤胤」

②おりせさんの手紙について

現在佐倉市の国立歴史民俗博物館所蔵「平田家資料」。80通余。

「筆者織瀬の夫、国学者平田篤胤（1776～1843）は天保八（1837）無窮齋出版以来、幕府の要注人物と目されていたが、天保一二年の正月二日「公儀より御沙汰二付、父君国元へ御出被成候様御達」（『気吹舎日記』／国立歴史民俗博物館研究報告、平田国学の再検討二）を受け、わずか一日後の正月一日夕七ツ時、織瀬とともに江戸根岸の住まいを秋田に向け、出立した。」

（拙著史料集『平田篤胤後妻織瀬の秋田からの手紙』解題）

手紙は 天保12（1841）年1月11日江戸出発の模様にはじまり

途中、秋田藩陣屋のある仁良川に数ヶ月留まり、春の来るのを待ち

4月22日 秋田へ到着

藩の重臣・親類からの歓迎の様子を伝えるが、正式に藩の旗本に登庸されるのは天保12年11月24日の、ことであった。

その後、天保14年閏9月11日暁4ツ時篤胤は秋田の地で病死することになる。

手紙は、天保12年正月17日にはじまり、天保13年12月16日に終わっている。

この度の手紙は、おりせさんが江戸の疎胤・お長に宛て、時には孫たちに宛てて書き送ったもので、平田家に大切に保存され今日まで残された手紙である。

国立歴史民俗博物館の所蔵となり、前館長宮地正人氏の在職中に進行された即日閲覧の方針が可能となり、私のような在野の人間であっても、研究目的が明確であれば手続きを経て閲覧ができることとなった。今回の史料翻刻はその賜物であると思っている。

*おりせの手紙―文字を習得した女性の80余通もの手紙は国学者平田篤胤の家経営・気吹舎経営における「主婦」おりせ（聚商Ⅱ庶民レヴェル、の娘）の記述の中に、当時の習俗とともに共同経営者の存在を確認できるものとなっている。

*なお、本日のおはなしは平成22年度日本学術振興会科学研究費補助金、奨励研究個人「近世の「主婦・主婦権」の実証的研究」課題番号23904017 の研究成果によるものである。

③ 手紙から読む、おりせさんの家計・苦勞ばなし

おわりに

以上、雑駁ながら、おりせさんの手紙をみてきました。このうち、気吹舎は3代目おりせに引き継がれて明治維新を迎えます。わたしは「おりせ」という名称は、平田家家刀自（Ⅱ近世の「主婦」）の名跡継承であったとみています。おりせさんの、聡明闊達、機知に富んだ批評眼、ユーモアをもち、衣類を整え、米・薪、祝い膳を整え、奉公人を使い、家の祭祀を行い、借金もし、家塾の経営を行い、事に当たっては物怖じしない堂々たる近世の主婦の姿を、お伝えできたでしょうか。拙い報告をこれでおわります。ありがとうございます。

かへす／＼も此地へ参り候ても、小野崎さま
御やくからの事ゆへ、ま事ニ／＼みな／＼
よくきを付、せわ致くれまいらせ候、
いよ／＼みな／＼御機嫌よく御くらし
よろしく御ねかひ申まいらせ候、かしく

(采尚々登ママ)

被成候御事、御めて度そんしまいらせ候、此方、御ち々様御初兩人共、すこやかに候ま々、御心安し召被下へく候、十一日二ハ、そうかへ五ツ半時二宿へ付、よく朝出立、こしがや油へ、へへもより、とうふやへより候所、おふきニ／＼ちそうニなり、十二日二ハさつてへ宿り、十三日の朝二はん舟ニてくりはしをわたり、いもからしんでんへひる七ツ時二付、夫よりかやはしへ参り候所、五ツ半時二ハしんやへ付候、此方みな／＼せわよくいたしくれ、ふしやうなる事少しもなく候ま々、かならず／＼御あんし被成ましく候、いなかやひろさ七疊ニとこのま付、つき四疊おし入付、代所拾疊、其外物お所々ニ有、ま事ニひろく御座候、しかし山ちかく候ゆへか、寒きま事二つよく、夜ふん御は入の水かうり、二たち候ゆ入候ハねハとれかね、これハこまりまいらせ候

一 御ち々様御ちやのみちやわん、子供、進藤さまより被下候重ばこへ、なすのかう／＼御あらい入
一 さつまさまよりいた々きのちやわん十

一 「さつま」御たばこ、弓はりてうちん、向かけのほう
一 黒ちりめん御は折一ツ、こしおひ一ツ

一 御はかま一ツ、御ふたんきの小袖一
一 市太郎あわせ一ツ、此外御こ々ろ付被成候品御座候ハ御こし被下へく候

かやはしニても、みな／＼ニせわニなり候ま々、ふろしきニかみを付、四人へ遣ハし候、又、御酒代も少々遣ハし候、御ふちハ三人分いた々候ま々、御安心被下へく候、十一日より十三日の入用、老兩式分つかひ候、もつともくりはしニて、老分式朱程よふんの事御座候ゆへ、入用もかゝり候、此所より十日よりたひ、夫より御両ふんへはいり候てハ、ものも入ぬと申事ゆへ、御小人参り四人ニなり候ても、六両も有ハ参り候と、咄おり候、こもと「来」月十五日ころの出立ニ致ても、小遣イ老兩も有ハよろしくと、そんし候ま々、さ候へハ、八両式分も入用ニなり候、これハ少々勘定らくニつもり候なり、手ニ残る所ハかんかへ、少しも此方の事御あんし被成ましく候、只々くろうニなり候ハ其御地の事、御兩人ニていか程ほねおり候事と、朝夕申つ々けまいらせ候、御国へ参り、はやく御取まいきまり、江戸へまハし候やう致度と、夫のみたのしみおりまいらせ候、此方へ参り候ても、御ふちもいた々き、したくもいた々き、出火ニハ残り、また、御うんつきぬ所御座候と申、日々御咄し致候へとも、一兩年、五人の子供をみる事もできぬ、此やうなかなしき事ハなく、はやく来年ニ致度、今よりまちとうニ御座候、何とそ／＼進藤様へ御そうたんなされ、はやくみな／＼ひとつニなり候やう御ねかひ被下へく候、おす々ハ、日々あいらしくなり候とおもひ、夜ふんも、子供の事はかりゆめにみ、御さつし被下へく候、十五日ニ小林と申内から、十二才なる男子、わか餅重はこ入、遣イニ参り、鉄弥くら(い)子ゆへ、ま事ニ／＼むねふさかり候、子供たいしニよく／＼御そたて被成へく候、とても、とうふんわかれ候ハ、いくら申してもしかた御座候なく、御たかひ御身あづかり物とそんし、やうしやうだいいちニ御座候、十五日ニ、五間よりわか餅たくさんニ当来致、少々こまり候ほどの事候、十五日ニ石はし村松兵衛の所へ市太郎遣ハし候所、松兵衛同道ニて参り、御あい被成候て、内蔵之介殿より御さし出しの御状、此地小松屋と申者、小野崎さまより受取、こもとへ参り、かみ入にもつ、さかし候ても御座なく、此方わひ致、何とも致かたなく、こまり候事とそんし候、小野崎さまへそまつニ致候やうに、思し召有候てハ、御ふきやうゆへ、すみ不申と、なけき候ま々、此事ハ小野崎さまへハ御内々ニ被成、つかわされ候御状なくさり候て、あしき事した々め御座候ハ、小松屋へよく／＼せんき致候やう申付候ま々、一寸御申こし被成へく候、丹蔵いつけんいか々候や、御あ

んしまいらせ候、いろ／＼御よこし物書付候へとも、御ふつかうならば、ま二あい候物はかり御こし、御心ごこころはい被成ましく候、市太郎つかひあけ候てもきつかひ、此方もふつかうに御座候間、御小人参り候せつ、御せわなからたのみ候かよろしくやと存候、十八日ニきうニ出立の者御座候と申、十七日夕方うけたまハリ候ま、夜ふん目かねニてしたゝめ、大らん筆、御よみわけ被下へく候、岩崎さま・石はしさま・「進藤さま」つ川さま、其外御残りなく、よろしく／＼御たのみ入まいらせ候、いそき、

めて度かしく

十七日ハおふきおふきだだいだいだニ候へとも、ま事二いななかゆへ、そんなから何もてき不申、咄しのみ致おりまいらせ候

かやはしニて

おてうとの

はゝより

口上

一筆申まいらせ候、まつ／＼四人かきけんよく、おなかよしに御あそひ被成て、御ちゝ様と市太と、日々咄しおりまいらせ候、来年ハよいおみや、たんとちさん致候ま、おとなしく御まち被成候、御とゝ様・御かゝ様ニせわやかせぬやうニ、けかいたさぬやうニ、おまち被成候、おみかをかわいかつて御中よし被成へく候、おすゝもかわいかつて、みんなか大きくなつて、まつて御出被成へく候、およしさま・万さま・おくわさま・吉蔵殿・おかよさまへも、よろしく御申被下へく候

延太郎との

はゝ

鉄弥との

かね三郎との

おみかとの

(以下篤胤宛)

無窮曆の附録、江戸の人にハまづめつたに見せぬよう、随分々々御用心可被成候、屋代の手よりひろまる分ハ是非に及ハず

我ら帰り候まで、随分々々用心神妙ニして、横行ならず、能々ツゝシミ、気を付候事肝要なり、進藤君と諸事御相談、何事もツゝシミ、メツタナ事ニ懸り合ナキ様專一二候

清水の類葉もどふそ表紙をつけて被下

岡本ニかり写したる本、汚表紙のこと、右専要のこと共

さて平太郎の本

関帝せんうツスベシ、ユル／＼

屋代より座右抄カ、軍用記力をかり、よこすこと

御内人へ万々よろしく

岡本よりかりたる通志、うツスこと、ユル／＼

諸葛ニカリタル授時曆の数の所ハ、ミナオキテ、其外ハ、ミナウツシタキモノ也、ユル／＼御心カケ

行智ニカリタル悉曇字記二卷、ドコニカアリ、見出テ御返し可被成候、ヨク礼ヲ云ベシ

廿二日ニ小金井宿へ出て、進藤君ニ逢ふツモリ也

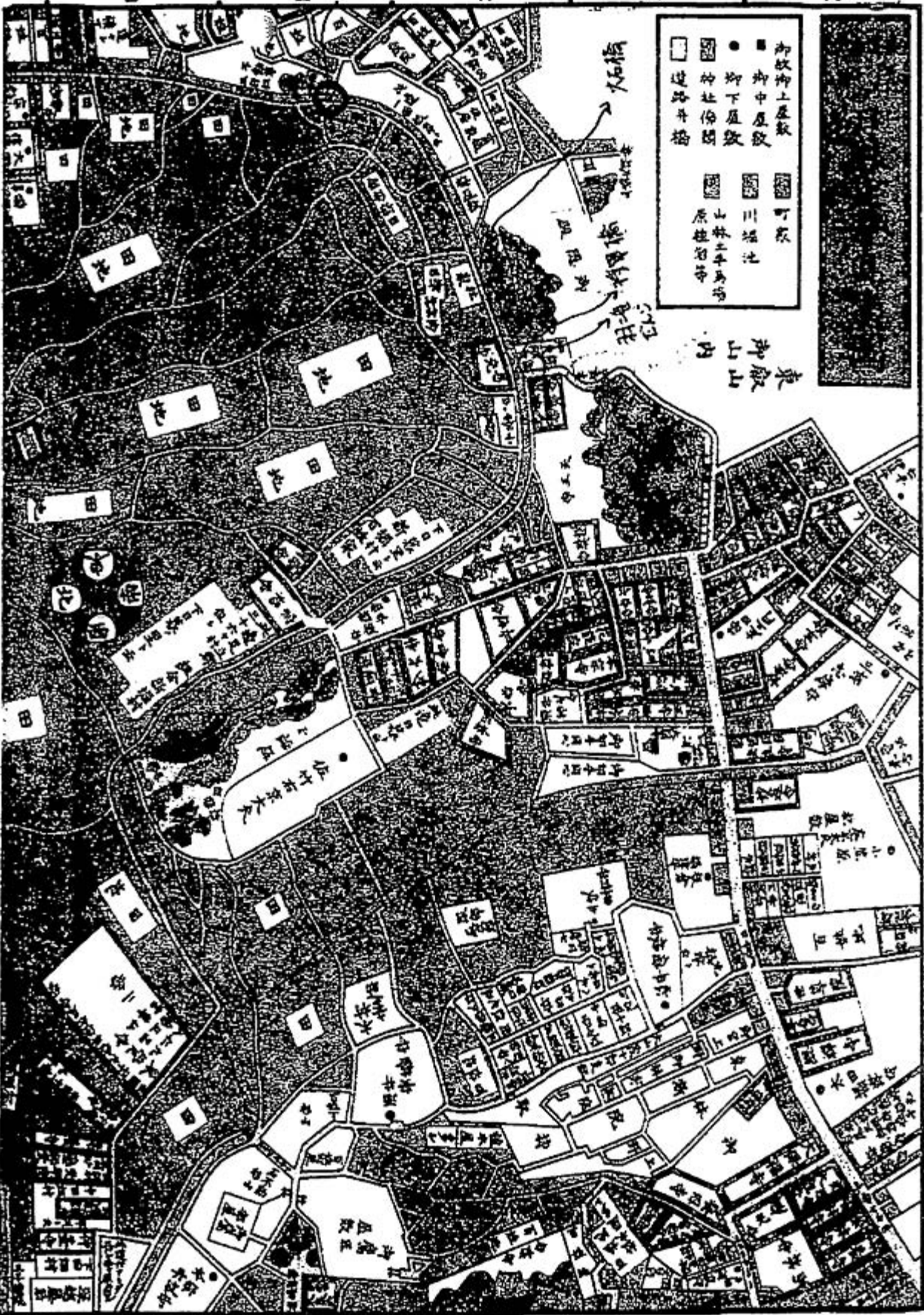
(国立歴史民俗博物館所蔵、平田篤胤関係史料 3125)

*『史料集 平田平田篤胤後妻織瀬の秋田からの手紙』(翻刻・編年・著横山鈴子、史料校訂

宮地正人、私家版非売品、2012年)より転載。

*なお、本史料集は平成22年度日本学術振興会科学研究費補助金、奨励研究「近世の「主婦・主婦権」の実証的研究」により作成。

①根岸谷中日暮里豊島辺図(一八五六年) (真如永慶庵江戶切絵図 人文社一九九五より転載)



- | | |
|--------|--------|
| 御成御上屋敷 | 町家 |
| 御中屋敷 | 川端池 |
| 柳下屋敷 | 山林二年馬場 |
| 神社佛閣 | 原住者等 |
| 堤路井橋 | |

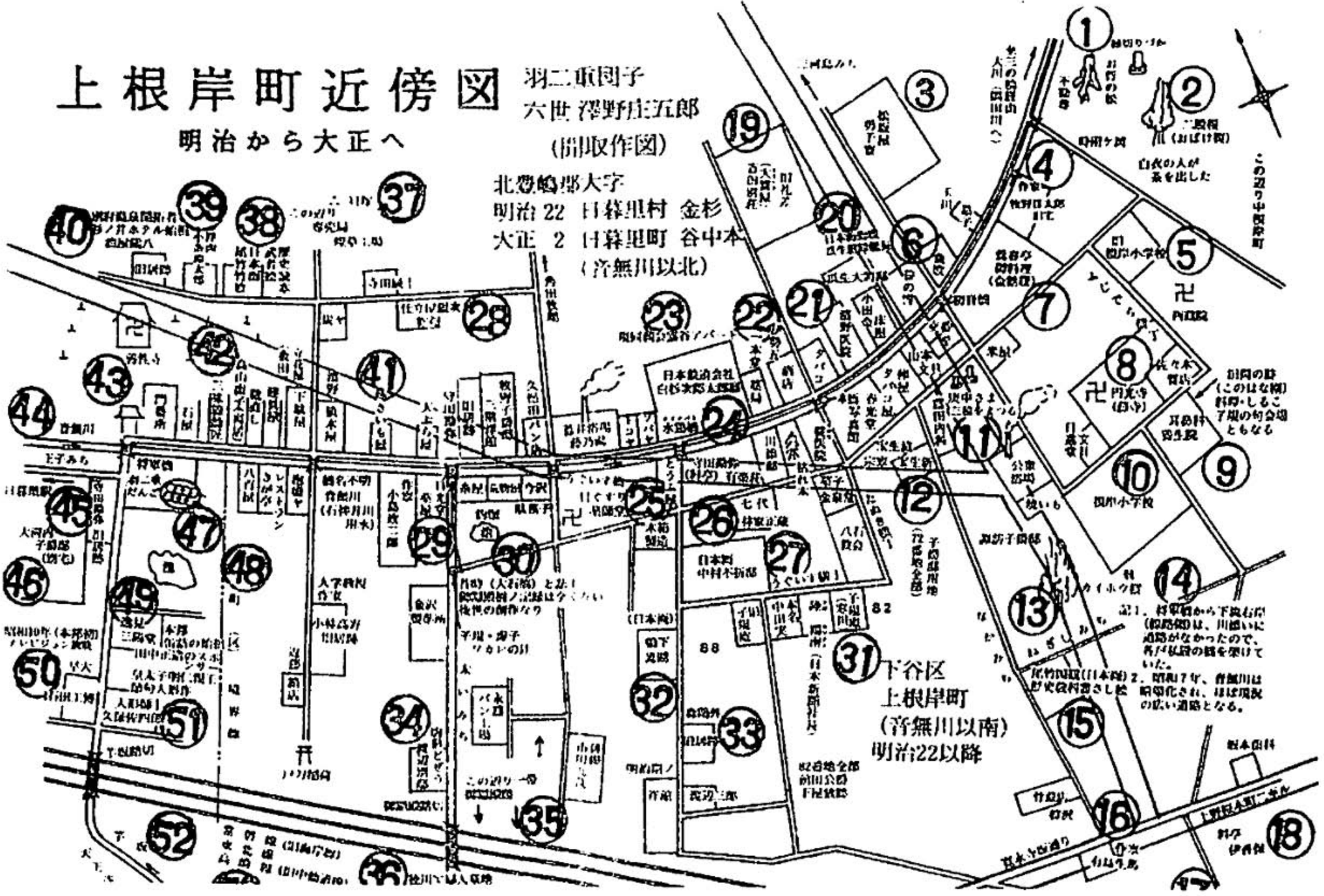
上根岸町近傍図

明治から大正へ

羽二重岡子
六世 澤野庄五郎
(開取作図)

北豊嶋郡大字
明治 22 日暮里村 金杉
大正 2 日暮里町 谷中本
(音無川以北)

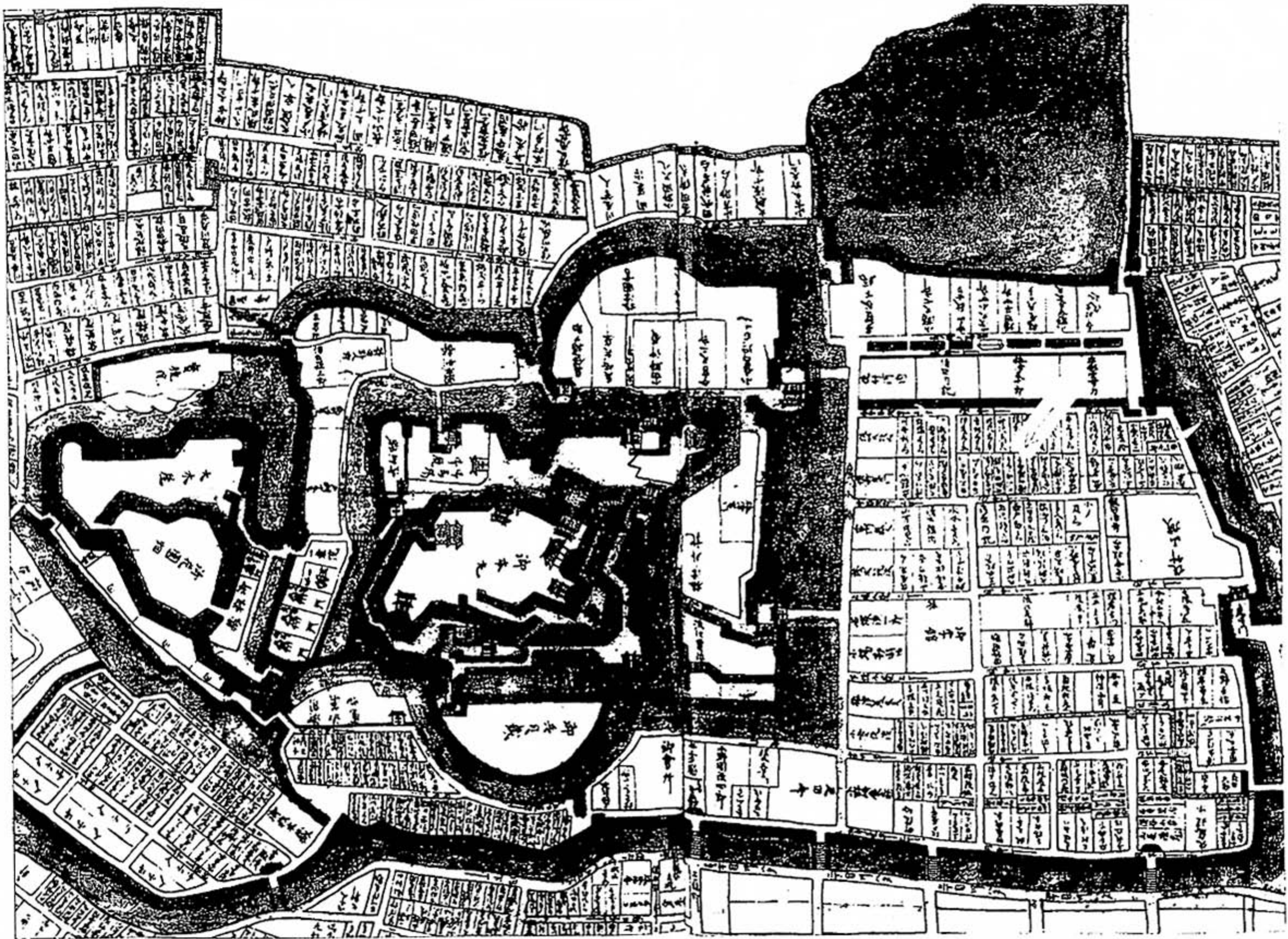
下谷区
上根岸町
(音無川以南)
明治22以降

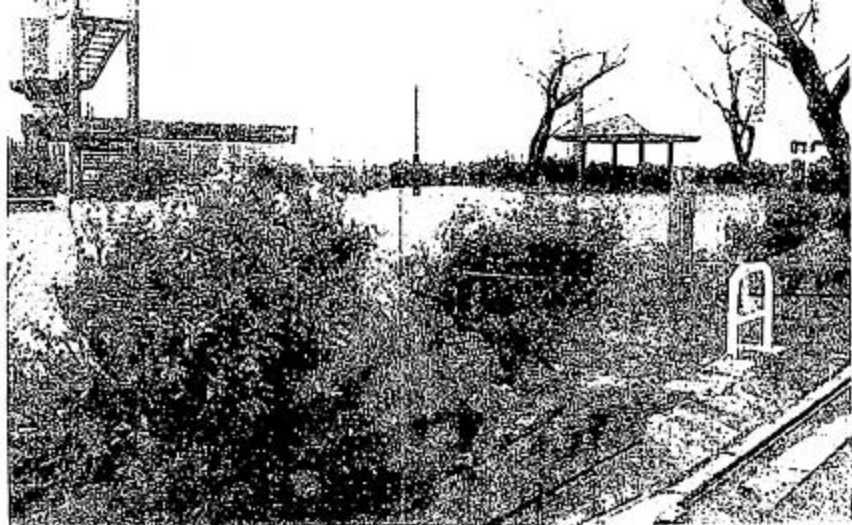


21. 村中から下流右岸(即路側)は、川筋いに道路がなかったため、各戸私設の橋を架けていた。
22. 昭和7年、音無川は昭和化され、今は現況の広い道路となる。

No. 23 羽州久保田大絵図

(部分) 文政期末





秋田市中通
平田篤胤生家跡



秋田市南通亀町
平田篤胤終焉の家教跡

岩地正人他
『明治維新と平田国学』→
(国史館文化民俗博物館、2004)
より転載

平田篤胤肖像
(写真提供 平凡社)



岩地正人他『明治維新と平田国学』→
(国史館文化民俗博物館、2004年)
より転載



平田篤胤肖像
平田家に伝来した、表装さ
れた肖像画二点のうちの一
点。学田平安忠敬写。羽織に
付けられた平田家の家紋は、
「ねじまんじ」という。(写真
提供 平凡社)